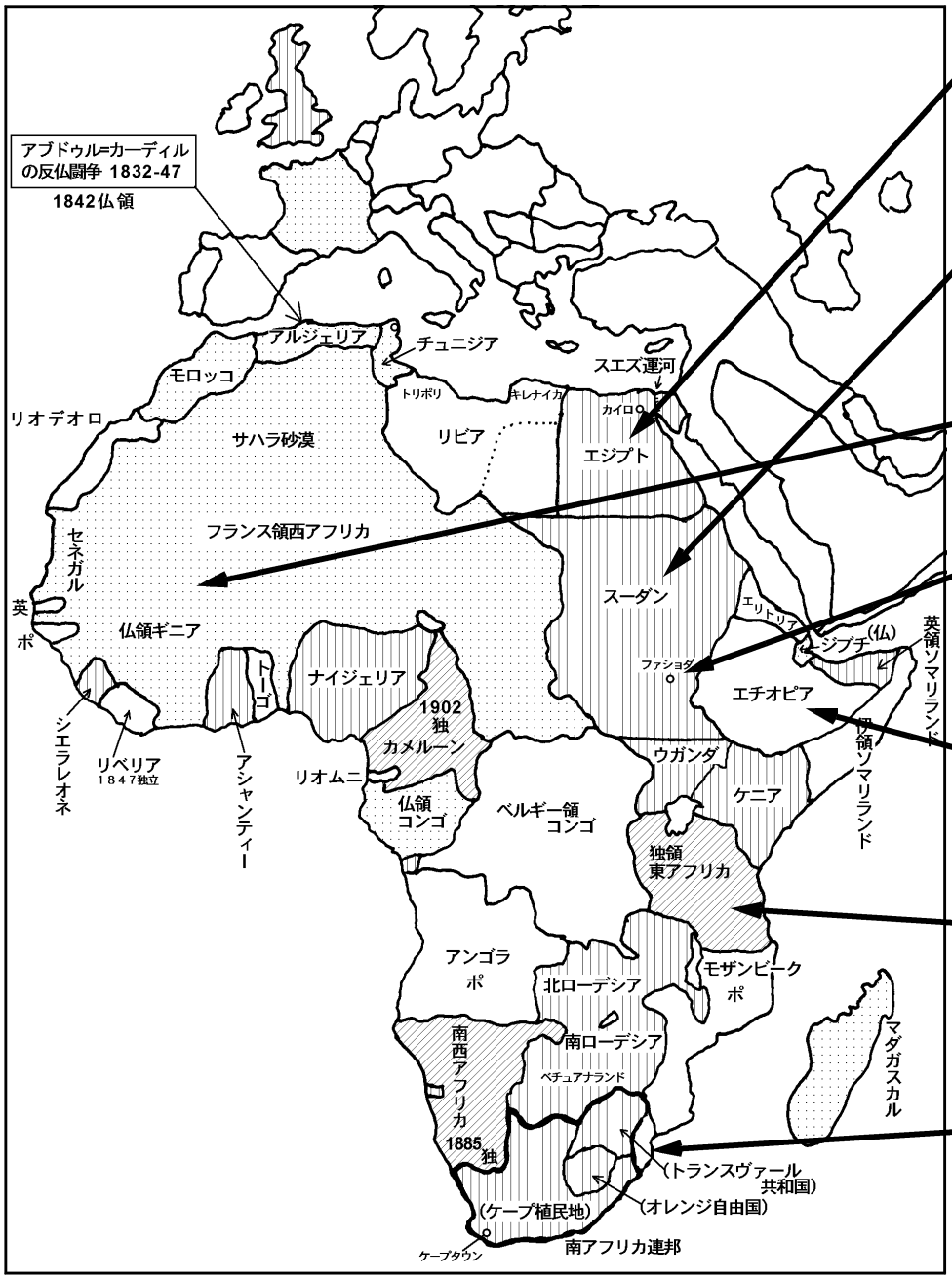
19世紀半ばの中央アフリカ探検が植民地化のさきがけに　　№144参照

1）コンゴ川流域を探検しつつアフリカ大陸を横断した【1:　　】は、1876年、ベルギー王【2:　　】に派遣され、現地の首長たちと条約を交わし、【2】はコンゴ支配を既成事実化した。ポルトガルが反発、イギリスはこれを支持。フランスはベルギーを支持。この対立を収拾するため、1884～85年、ビスマルクの提唱で【3:　　】（ベルリン=コンゴ会議）が開催された。1787年のベルリン会議との混同に注意せよ。

2）ベルリン会議は、コンゴ川流域の統治権をベルギーに、ニジェール川流域の統治権をイギリスに認めた。コンゴは事実上レオポルド２世の私有領で、1885年に形式的な独立国家コンゴ自由国が成立、1908年には正式にベルギーの植民地となった。ベルリン会議でアフリカ植民地化のルールが確認され、以後、アフリカを植民地化する場合は、ベルリン協定調印諸国にその内容を通告し、会議で確認された原則※を遵守することが求められた。アフリカ分割は、ウラービー運動を契機とする**イギリスによる【4:　　】の保護国化**（1882）で既に始まっていたが、ベルリン会議を契機として列強はアフリカ大陸に殺到し、**アフリカ分割は本格化**した。

※ この原則の一例：《ある地域を植民地にする国は、その地域でのヨーロッパ人の安全や商業活動を保障できなければならない（実効支配）》。あまりにも有名な《アフリカは「無主の地」なので、**先に占領した国に領有権が生じる**（先占権）》もこの原則の一つ。《蛇足》落とし物の財布をネコババしても占有離脱物横領罪に問われる。アフリカは落とし物以下の扱いだった。

アフリカの人々は、各地で果敢に抵抗した。



【5:　　】
1881-82　　注１
「エジプト人のエジプト」

イスラームによる
【6:　　】
1881-98　注２
ムハンマド=アフマド

【7:　　】
ひきいる民衆の抵抗
1870年頃～1898　注３

英仏の衝突　1898年
【8:　　】事件
→英仏協商 1904　注４

【9:　　】の**戦い**
1896年、エチオピアの**メネリク２世が**イタリア軍を撃破
注５

【10:　　】
1905-07
綿花強制栽培反対の
対ドイツ反乱　　注６

ズールー王国
イギリスの侵略に抵抗
1879年　　注７

南アフリカ戦争　　注７

こうした抵抗運動（後掲解説参照）は、民族主義運動や民族解放運動に成長していった。

注１　エジプトは【11:　　】を開通させた（1869）が財政難に陥り、1870年代にはイギリス・フランスによる財政管理・内政干渉を招いた。大幅な軍の縮小で失業軍人も増えた。1881年、ウラービー大佐の指導で、立憲制の確立、議会の開設、ヨーロッパ列強による内政干渉の排除などを求めて武装蜂起が起きた。エジプト初の民族運動である。イギリスの出兵で1882年鎮圧されたが、「エジプト人のためのエジプト」はその後も民族運動のスローガンとなった。1882年に事実上イギリスの保護国にされ、正式な保護国化は1914年。

注２　19世紀末にナイル川流域の東スーダンでマフディー運動が起きた。マフディーとはアラビア語で「導かれた者」。「救世主」の意味であるが、指導者の【12:　　】は、1881年、自らがマフディーであると宣言して**マフディー国家を樹立**、イスラーム教徒による反英武力闘争が始まった。イギリスは鎮圧に手を焼き、この反乱はイギリスのスーダン進出を10年遅らせたと言われる。1898年に鎮圧され、1899年から再びエジプトとイギリスの両国による共同統治下に置かれた。なお、白ナイル・青ナイルが合流する軍事要衝ハルツーム（現スーダン首都）を守備していた常勝軍指揮官として名高い【13:　　】は1885年に敗死した。

注３　西アフリカのフランス領ギニアにおいて、サモリ=トゥーレ 1830?-1900 はイスラーム信仰を背景にサモリ帝国 1870?-98 を建て、1882年以降フランスに武力抵抗したが、1898年逮捕され獄死。彼は後のギニア独立の父、セク=トゥーレの曾祖父にあたる。

注４　ファショダ事件については、№162で詳述する。

注５　エチオピア帝国はイタリアによる植民地化の脅威にさらされていた。【14:　　】はフランスから武器供与を受けて1896年、アドワの戦いに勝利しイタリア軍を撃退した。「アドワの報復」と「文明の使節」を掲げてイタリア軍が再度エチオピア帝国に侵攻したのはムッソリーニ政権下の1935年。1936年から1941年にかけて植民地に編入された。

注６　ドイツ領東アフリカ（今日のタンザニア連合共和国）では綿花強制栽培反対の対ドイツ反乱が起きた。弾丸を水に変えてしまうと信じられた「魔法の水」（マジ）を飲んで戦ったことからこの名がついた。

注７　ズールー王国侵略・南アフリカ戦争については、№159で詳しく述べた。

当時の「植民地主義者」が好んで使った用語

各自検証せよ。21世紀の今日でも姿を変えて再生中。

「文明化の使命」論　植民地の経済開発によって先住民の生活が向上する。
①本国の進んだ医療や教育、社会制度が植民地に導入されるから。
②道路、港湾、電力、通信設備など植民地のインフラが整備されるから。

同化主義　教育を受け文明化された先住民には本国人と同等の権利を認める。

人種主義の実情

こうしたアフリカの植民地化の根底には人種差別があることは言うまでもない。

１）帝国主義時代の**人種差別**は、ドレフュス事件のような形をとることもある。

２）アメリカ合衆国における**移民差別**では、ユダヤ系、アイルランド系、イタリア系、アジア系が最も差別された。同じくアメリカ合衆国では、1890年代に南部諸州が州法（ジム=クロー法）で黒人の権利を制限した。№140参照。

３）アメリカ植民協会（1816創立）は1822年以降解放奴隷をギニア湾岸の西部地域の一角に送り込んできたが、その目的はなんとアメリカ合衆国を白人共和国にすることだった。この地域は1847年にリベリア共和国として独立。アフリカ最初の共和国である。バックにアメリカがついているので西ヨーロッパ諸国は手を出せなかった。しかし、国内は独裁政治で、現在では国民の多くが難民化している。便宜置籍船が多いことも有名。1960年にアフリカで17の国が独立して「アフリカの年」と呼ばれたが、その例外としてアンゴラ（1975独立）とともに出題例がある。

2006上智大学　改作

空欄に適語を記し設問に答えよ。　　なお、実際の問題では空欄には選択肢があり記号で解答する。

Ⅰ　この反乱は、1881年から翌年にかけて、軍人が「エジプト人のエジプト」をとなえて武装蜂起したもので、エジプト民族運動の出発点となった。19世紀前半に近代化を急ぎ、二度の（　ア　）との戦争などによって莫大な債務をかかえこんだエジプトは、1860年代から（　イ　）と（　ウ　）による財務管理と内政の支配を受けるようになっていた。また、（　イ　）の外交官の提案で建設され、1869年に開通したスエズ運河に関しても、（　ウ　）が1875年に財政難のエジプトから運河会社の持ち株を買収して経営権を握り、エジプトに対する介入を強めていた。この反乱は、このような外国支配に反抗する蜂起であった。反乱のリーダーは憲法の制定や議会の開設を行う立憲革命をめざしたが、（　ウ　）軍に鎮圧され、反乱は失敗に終わった。（　ウ　）は、鎮圧のため単独出兵したのを機に、運河地帯を軍事占領するとともに、以後エジプト全域を事実上の支配下においた。

Ⅱ　この大反乱は、1825年から1830年まで、オランダ統治に対し、王族が指導して起こしたものであった。オランダの植民地経営は当初、東インド会社が行い、（　エ　）貿易で大きな利益を得ていた。しかし、（　エ　）の価格の下落、海上権の衰退、関係者の汚職などで会社が破産状態となり、それに本国が（　オ　）に征服されたことが重なり、1799年に会社は解散した。そのため（　オ　）の没落後、この地の統治は直接オランダ本国が行ったが、住民にとっては暴政であり、蜂起に至ったのである。大反乱は結局鎮圧されたが、オランダの東インド政府の財政窮乏を招いた。鎮圧の年に着任した総督（　カ　）は、財政状況改善のため強制栽培制度を実施した。オランダは強制栽培させた作物を安価に買いあげ、その輸出により莫大な収益をあげたが、現地では米不足が起こり、飢饉が続発することになった。

Ⅲ　この反乱は、1881年に、自ら救世主であると宣言した（　キ　）に率いられたスーダンのイスラーム教徒が、主に1869年以降この地を侵略しつつあった（　ク　）に対して起こした抵抗戦争である。現在のスーダン共和国につながるスーダン・ナショナリズムの先駆とみなされている。反乱軍は1885年には白ナイル川と青ナイル川の合流点の都市ハルツームを占領し、その際に（　ク　）が鎮圧のために派遣していた（　ケ　）が戦死した。同年（　キ　）が急逝したのちも、彼の建設した国家体制はしばらく維持されたが、1898年に（　ク　）と（　コ　）の連合軍に滅ぼされ、翌年、スーダンは両国の共同管理となった。

設問　　上記ⅠからⅢまでの反乱や蜂起の名称を記せ。